

文 化 財 指 定 調 書

(岡崎市・幸田町共通)

1 種別、名称及び員数	無形民俗文化財 山方手永御田扇祭り
2 行われる時期 および場所	7月の日曜日 岡崎市内及び額田郡幸田町内の13箇所 岡崎市：井内町、下和田町、国正町、正名町、定国町、中村町、 坂左右町、野畑町、若松町、針崎町、柱町、羽根町 額田郡幸田町：永野区 ※若松町、針崎町、柱町、羽根町は山方手永御田扇祭りに関わ る旧来からのマチを表す。
3 所有者又は保持者の 住所及び氏名	山方手永御田扇祭り保存会
4 概要	山方手永御田扇祭りは旧岡崎藩領の山方手永の区域内（現岡崎市内12箇所、額田郡幸田町1箇所で構成）で行われ、五穀豊穡・町内安全・天下和順などを願い、毎年1年毎にマチからマチへと神輿を中心とした渡御行列により手永内を巡行する民俗行事である。 御田扇祭りはその形態から岡崎藩の農民支配制度である手永制度との深い関わりが指摘されている。手永制度は正保2年（1645）に水野忠善が岡崎藩主に就任すると成立するとされ、寛文4年（1664）の時点で九手永に区分されている。水野家時代に御田扇祭りが行われたことを示す史料に宝暦年間（1751～1764）に作成された「諸色覚書 東矢作村」に東矢作村庄屋の記録があげられ、御田扇祭りの存在を示す史料上の下限となる。史料からは、旗・ほこ・ぼんてん・傘鉾・輿などを伴う巡行形態であり、田扇が手永間で送迎される形態であることが確認できる。 後本多家時代（1769～1871年〔1601～1645年に藩主であった本多家を前本多家といい、区別する〕）には手永は六手永に区分され、御田扇祭りに関する大庄屋からの「順村触れ」の史

	料からは、手永内の村から村へ田扇を送迎することが確認でき、水野家時代にみる手永から手永への田扇の送受は見受けられない。このことから、後本多家時代には現在のような手永内で田扇を送受する形態となったとみられる。 御田扇祭りにおける岡崎藩の関与を示す事柄として、御田扇祭りの開始（出発）時期の指示が岡崎藩から出され（註１）、六手永で一斉に開始されている点があげられる。さらに、文化 14 年（1817）に伊勢神宮祓札の受取を大庄屋に命じる史料があり（註２）、天明元年（1781）に岡崎藩が伊勢御師の山本大夫と春木大夫の兩人に扶助し、家中扱いとしている事実を勘案し（註３）、御田扇祭りと伊勢信仰が藩主導の下に結びつけられたものと想定される。実際に額田手永の神輿の中から春木大夫銘の大麻が発見され、伊勢信仰と御田扇祭りの関わりを示す資料として注目される。 現在の山方手永御田扇祭りは、後本多家時代の順村を基本とし、手永内の 13 箇所で行われている。巡行は 1 年に 1 箇所移動する形態であるが、隣マチへの移動ではなく、隣マチを一つ飛ばして巡行し、隣マチでは休憩所として通過する。数日かけて全村を巡行する近世の形態からは変化が認められる。 伝承では大庄屋斎藤家のある下六名から占部用水筋 25 か村を昭和初期まで盛大に巡行が行われていたとされるが、昭和 16 年から太平洋戦争により中断し、戦後混乱期を過ぎた昭和 31 年に復活したとされる。昭和 61 年には 15 箇所で行われていたが、2 箇所が巡行から抜け、現在では 13 箇所での巡行へと変わっている。 現在の巡行で引き継がれる「威儀物」は、「皇大神宮御田扇祭受渡 御目録」（昭和 31 年の本紙の上に和紙を貼り、その年の引き継ぎ品を記したもの）に記載されているものとして、御神燈 2 本、日月旗 1 対、雪洞 1 対、御幣 1 本、御田扇赤白 1 対、御神輿、御神輿台 2 台、御櫛桶 1 基、花笠 1 本、梵天 1 対、幟旗 13 本がある。昭和 31 年段階の目録には、大団扇赤白 1 対が昭和 58 年に、花笠 1 本が昭和 59 年に、雪洞 1 対が平成 13 年に新たに加わったことが追記されており、威儀物についても現代以降の変遷が見受けられるが、先述の水野家時代の宝暦年間
--	---

	にみる、旗・ほこ・ぼんてん・傘鉾・輿などは現在の神輿、梵天、花笠に相当するものとして捉えられ、近世にはすでに採用され、補修や新調を繰り返し現状に至るものと考えられる。特に、神輿については「文化 11 年（1814）本町文治郎作塗師清吉外一名」とあり、近世にさかのぼる「威儀物」として貴重である。また神輿内には現在、伊勢神宮外宮の豊受大神宮の御神札が納められているが、かつて扇が納められていたことが古写真にて確認ができる。 御田扇祭りは岡崎藩の農民支配制度の中で、虫送りや伊勢御師の廻壇配札行為と結びつき行われてきた民俗行事であり、現状は近世の形態からの変化が認められるものの、祭りの根幹を否定するものではない。岡崎藩の施策と密接に関わる御田扇祭りの存在は歴史的にも重要であり、他に類をみない民俗行事である点も大きな特色であり、注目に値する。
5 その他参考となる事項	近世の文献史料では「御田扇様」で始まる「順村触れ」が多く確認できる。また祭りとしては「皇大神宮御田扇祭」と称される他、「（御）田扇祭（り）」「田扇習俗」等と表記されることもある。『新編岡崎市史』では「御田扇祭り」と表記されており、指定名称もこれに準拠する。
6 註	註 1 永井家文書 小呂村の石原友右衛門から大庄屋の洞村永井利右衛門に、藩から先年のとおり祭礼を行うよう沙汰があったので、6 月 7 日より開始する予定で村々に触れを出すように伝えたもの。 註 2 内田家文書 文化 14 年の「御用留」で、藩奉行所から大庄屋鈴木幸吉と孫右衛門に「勢州御祓」を渡すための出頭を命じ、田扇内に納める御札を御納戸で渡すため大庄屋兩人と申し合わせ請取りに出向くことを六手永の大庄屋に伝えられたもの。 註 3 中根家文書 天明元年の「岡崎・江戸御扶助様帳」で、伊勢御師の山本大夫と春木大夫の兩人に米 40 俵余を扶助し、家中扱いとしている。



山方手永御田扇祭り 渡御行列〔平成25年度 野畑町⇒若松町〕



山方手永御田扇祭り 渡御行列〔平成25年度 野畑町⇒若松町〕



御神輿



榊樽



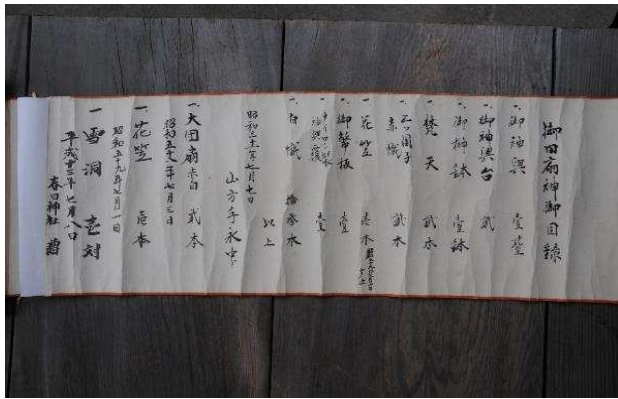
日月幟 1対



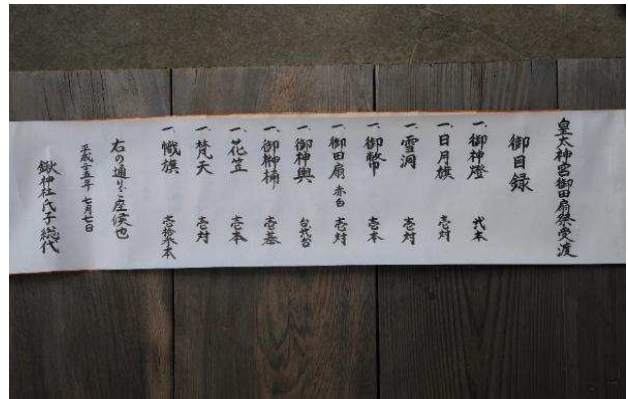
花笠 1基



左から 高張提灯1対、御田扇赤白1対、日月旗1対、雪洞1対、梵天1対、各町小幟13本、花笠1基



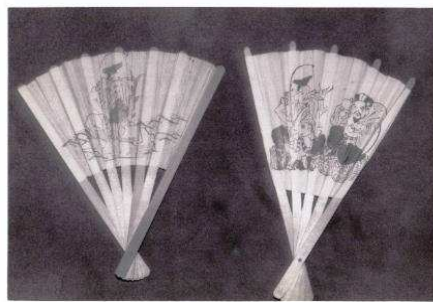
皇大神宮御田扇祭受渡 御目録(昭和31年)



皇大神宮御田扇祭受渡 御目録(平成25年)



皇大神宮御田扇祭受渡 御目録箱



扇



賽銭袋